IUHW

41号

The gazette of International University of Health and Welfare

特集

谷 修一 学長にうかがう

第6回 風花祭 開催

大学院研究計画発表会 報告

国際交流 in 大田原

発　行 ： 学校法人国際医療福祉大学 平成13年12月3日
編　集 ： 広報委員会　TEL 0287-24-3000　内線8116
ホームページアドレス　http://www.iuhw.ac.jp/

谷 修一 学長にうかがう

谷　修一　学長

：：谷学長は、十月より本学の学長にお就きになられたわけですが、教職員及び学生もどのようなお考えをお持ちなのか、またどのような方なのか、とても関心を持っております。そこで、学長のこれまでの経過や今後本学をどのようにお育てになろうとお考えなのかなどについて色々とお伺いしたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。早速質問をさせて頂きたいと思いますが、前号のＩＵＨＷに学長の経歴を掲載させて頂きましたが、再度、本学とどういうきっかけでお知り合いになられて、こちらにいらっしゃることになったのかなど、本学にいらっしゃるまでの経緯についてお聞かせ頂けますでしょうか。

学長：：この大学との関わりというのは、確か一九九一年、十年位前だったと思います。その時まだ厚生省にいて、厚生省でも医療技術者専門のいわゆる教育機関というか、保健医療福祉大学とかいう名前の構想をまとめたんですね。それがその後まとめられたゴールドプランとか、いわゆる保健医療福祉推進十ヶ年戦略というんですけれども、そういうものと一緒になってまとめたんだと思います。結局その構想としては、厚生省の中では実らなかったんです。ただ、その前後に、地元（栃木）の国会議員で、大蔵大臣、外務大臣、厚生大臣もやられて今はもうおなくなりになられている渡辺美智雄先生が、地元に大学を作りたいという話があり、その当時、今の高木理事長にもお話されていたんです。その話と、先ほど申し上げた保健医療福祉推進十ヶ年戦略とどちらが先でどちらが後かはよく覚えていませんが、そのことがあって、この大学を作る最初の時に渡辺先生や高木理事長と色々と話を聞いたり、意見交換をしていたんです。それが一番最初だったんじゃないかと思います。だから、私はこの大学ができることになって、まだこの辺に何もない時に一回か二回位来た、という記憶はあります。その後、この大学で是非仕事をしないかというお話があり、全く縁もないわけではありませんので、それではやってみようか、ということになり、この大学に来ることになりました。でも私は正直言って教育のことについては全くの素人ですし、大学についても自分が大学を卒業してから三十何年間、全く大学とは関わりのないところで仕事をしてきたんですよね。そういう意味では学生以上に自分が勉強しなければならないことが多いように思いますね。

：：厚生省にいらっしゃった、ということですが学生にとってはなかなかイメージが湧きにくいように思いますので、具体的に厚生省ではどのようなことに取り組まれていらしたのか教えて頂けますでしょうか。

学長：：若い頃は、伝染病対策とか、昭和四十年代にスモン病というのがあったんですね。また環境庁に二年位いたことがあり、四大成人病である、四日市喘息、イタイイタイ病、熊本の水俣病、新潟の水俣病の公害病の関係をやっていました。後半は、かなりの部分が医療のことですね。医療保険のことや、今のことばでいいますと医療提供体制や診療報酬、老人保健のことをやっていましたね。私がもともと厚生省に入りましたのは、大学を出てＷＨＯで仕事をしたいと思っていたからなんですね。ＷＨＯの職員として、できればアフリカや東南アジアなど、そういうフィールドで何かの専門家として働こうと思っていたんです。それで当時周りの人にＷＨＯで仕事をするにはどうしたらよいかということを色々と相談したんですが、それならば役所に入るのがいい、役所に入らないとＷＨＯに行けないと言われたんですよ。それでは厚生省に入るか、と思い入りましたが、志は途中で変わりまして、結局ずっと国内にいることになりましたね。

：：前号のＩＵＨＷに国際的な活動についても掲載されていますが、具体的にはどのようなことに取り組まれていらっしゃったのでしょうか。

学長：：ＷＨＯの職員になることはできませんでしたが、一九九〇年代に入ってＷＨＯとの関わりを持つようになりました。具体的に関係したのは主として政府の代表としてＷＨＯの委員会や出向理事会に出席する、ということですね。もう一つはそれに関連して、この大学とも関係のあった、ＷＨＯの事務局長をやられていた中嶋宏先生の選挙運動をだいぶやりましたね。

：：日本に留まらず、学長が国際的にも活躍されていることが分かってまいりました。では少し話題を変えまして、学長がこちらのキャンパスにおいでになられて、まだ一ヶ月半と日も浅いことですが、着任されて以来、本学また本学の学生についてどのような印象をお持ちでしょうか。初めに、大学としてはいかがでしょうか。

：：大学について言えば、私はこの大学の最初の入学式の時に来まして、その後はもう一回、リハビリテーションセンターが設立された時に来ました。その時改めて来てみまして、大学自体は、少なくとも施設の上では発展をしてきているという印象も持ちました。そして周辺を見ますと、学生の方達のマンションが沢山建ってきましたし、そういう意味では大学を中心として発展してきたなぁと思いましたね。

：：それでは、本学の学生の印象についてはいかがでしょうか。

学長：：学生については正直言ってまだよく知らないという方が正確だと思います。ただ大学祭などで話を聞いたりする中で、今色々と言われているような若者に比べると率直に言って、真面目な人が多いというのが最初の印象ですね。それとやはり、この大学は医療や福祉という目的をもって入学している人が多いですから、それだけ自分のやるべきことがはっきりと分かっている人が多いと思いますね。

：：学生が真面目であること、目的をもっているという点は私も同様に感じております。ところで学長は、本格的に教育に携わられるのは初めてとお伺いしましたが、新学長として新鮮な目でご覧になって、何か改善した方がいい点や、問題点はおみえになっていらっしゃいますか。

学長：：それはなかなか難しい問題ですね。正直言ってまだよく見えておりませんね。ただやはり一般論で言うと、大学というのは学生のためにあるわけで、学生を中心とした大学というのが第一義的にあるべきだと思いますね。それから医療はサービスである、そして患者さんは医療の最終消費者であるということが今や一般的に、非常に保守的な医療の世界でも浸透してきているという意味では、大学とか教育においても、最終的な目的というのは学生に対する教育であるということが最初であり、最後の目的だと思いますね。学生へどのような教育が行われて、それが学生にとって役に立つものなのかどうか、そしてその教育を受けた学生が五年後、十年後どういう風にそれを一つの自分の価値として利用していくのか、そういうことを基礎におかなければならないんじゃないかと思います。私はこの大学が、医療とか福祉について目的をもった学生が来ているということで、逆に職業人としての教育をする、というのが当然のことだと思うんですよね。違う考え方もあるのかもしれませんが、世の中に出てすぐ役に立つかどうかはともかくとして、基本的には職業教育であると漠然と思っています。では、どこを変えるのか、問題点は、ということについては未だ、私自身も勉強不足でよく分からないので、これから考えていきたいと思います。

：：それでは、質問がやや重複してしまいますが、学長はこの大学をどのような方向に導いていきたいとお考えなのか、学長のお考えや夢等を語って頂ければと思います。

学長：：医療とか福祉の分野では何と言っても大学で教育を受けた人を求める時代になってきたと思います。その背景には技術的に高度化されてきているだけでなく、医療や福祉の現場で全体をマネージメントできる人材を求めると思いますね。それと、どこでも言われることですが、チーム医療の考えが、現場でも強くなってきていますから、そういう意味で、この大学の強みの一つとしては、単に看護なら看護、言語なら言語という単科の大学ではなく、七学科の様々な分野の人が一緒に四年間あるいは六年間勉強して、お互いに知り合えるということが財産じゃないかと思います。私はやはり五年後、というのは少し早いかもしれませんが、十年後、十五年後にはこの大学を卒業した様々な職種の人が、お互いに協力をしながらそれぞれの場で、中堅幹部になっていると思いますので、医療や福祉の現場あるいは教育を支えていくのは国際医療福祉大学の卒業生になっていけば一番いいと思います。

：：この大学で学んだ学生が、日本全国で活躍することを私も心から期待しています。ところで、皆さんに学長のお人柄を是非知って頂ければと思いますので、プライベートなことで大変恐縮ですが、例えばご趣味とか特技とか、御自由にお話頂ければ、学長がどういう方か親しみがわくと思いますので、教えて頂けますでしょうか。

学長：：私は昔から言われているのは、非常に態度が悪いとか、それからとっつきが悪いと、そういうことは昔から言われていますね（笑）。特技といいますと、今熱心にやっていますのはゴルフぐらいですね。以前は中学高校からずっと山登りをやっていたんですよ。大学を出てからも、しばらくは結構一生懸命やっていましたね。昭和四十二年頃かな、今騒がれているアフガニスタンにも山登りに行きましたね。この二年位前までは、五月の連休に昔の仲間と必ず山登りに行くようにしていたのですが、相棒が腰を痛めてしまって、一人で行くのは好きじゃないので行ってないですね。

：：現在の厳しいアフガニスタンでの情勢について、アフガニスタンに行かれた学長としてはどのようにお感じになられているのでしょうか。

学長：：私は山の中に、二ヶ月位いたかな。アフガニスタンのヒンズークシュというところかな。もう三十年位前の話ですがその頃から、非常に地元の人達が貧しく、教育も十分に受けられないような、そういう意味では一般の人達、特に子どもは大変だなぁと思いましたね。その後ソ連との戦争があったり、内戦があったりしていますね。私が行った昭和四十二年頃は未だ王様がいた時代で、アフガニスタンの歴史の中では貧しいながらも比較的落ち着いていた頃なんですよ。その後繰り返し戦争が続いている国ですので、そういう意味では不幸なことだと思いますよね。同時に戦争が続く国というのは、政治家の責任が大きいと感じていますね。

：：ところで、学長は宿舎から大学まで歩かれているということを噂でお聞きしたのですが、実際はいかがでしょうか。

学長：：私の家は千葉県なんですが、普段は家から近くの電車の駅まで二十分位歩いているんですね。こちらに来たら車もありますし、遠いので車に乗っていましたがそうなると、歩かなくなりますよね。そこで地図を借りてきまして、宿舎から大学まで直線で測ってみましたら、約四、五キロメートルなんですね。それで自分の車でその直線にできるだけ近いように道を探したんですよ。三時間位かかったんだけれどね（笑）。私の車で行くと五、三キロメートル位で、それなら歩けると思ったんですよ。まだ二、三回位しか歩いていませんので道を修正をしなければならないところがありますね。車の通らない道じゃないと危ないですからね。時間は大体一時間位ですね。

：：その点については、学生や私達教職員も見習わなくてはならないと思います。最後になりましたが、学生及び教職員に対して何かメッセージをお願いできますでしょうか。

学長：：この間、私の大学の千葉大学で山岳部の五十周年をやったんですね。五十年間皆一緒にやってきて非常にいい仲間なんですよ。それで、学生はもちろん勉強もしなければならないですが、趣味でもあるいは仕事上でもいいことではないかと思います。大学時代に仲間を作るというのは非常にいいことですが、大学をよくして頂きたいというか、来年の入学試験で受験者が今年に比べてどうなるか未だ分かりませんが、例えば看護やリハビリ関係もまだまだ大学ができつつあります。その中、医療・福祉の分野で国際医療福祉大学は、先行した大学の一つですよね。もちろんもっと古い大学がそれぞれの分野でありますが、全体としては先行した大学として、今までは順調に延びてきたと思うんです。しかしこれからは非常に厳しい競争の時代入ってきたのではないかと思いますので、私はそれぞれの先生の立場で、大学について問題なり意見があれば積極的に私に直接聞かせて頂きたいと思います。

：：今回お話をさせて頂き、厚生省からいらっしゃったということでどのようにお話をしてよいのか迷っておりましたが、学長がとてもフランクなお人柄ということが少しずつ分かってきました。学長のお考えが今後どのように実現していくのか、期待を持って拝見したいと思います。今回は御多忙の中、楽しいインタビューをさせて頂きありがとうございました。

（聞き手：吉川千絵）

第6回 風花祭

◀地域の方による餅つき。学生による掛け声もあがりました。

▲学長のあいさつ。拍手と歓声がおきました。

▲E棟一階での演奏会。観衆も大勢いました。

2001 10/20,21

実行委員長から

こんにちは。風花祭実行委員長の佐藤裕樹です。今年の風花祭は十月二十日、二十一日に行われました。今年は当日の天気にも恵まれ、たくさんの来場者もあり、大成功のうちに終わらせることができました。これも実行委員をはじめ、参加団体、教職員、関係各位のみなさまのおかげだと思っております。ありがとうございました。

さて、今年の風花祭はまず新学長のあいさつで幕を開け、生の太鼓が迫力の大田原市与一太鼓の演奏、工夫を凝らした各団体のステージ発表、芸能人のお笑いライブなどがあり、最後は花火が上がり感動のフィナーレで幕を閉じました。特に芸能人お笑いライブは、実行委員の長期にわたる苦労と努力の末、一〇〇〇人以上を動員し、大成功させることができました。更に花火は予想を上回る盛大なものになり、一発打ち上がるごとに歓声があがりました。

また模擬店は、各団体が工夫を凝らしたもので、店によっては行列ができたりして、売り切れ続出となりました。更に地域の施設、団体にも参加していただき、学生と地域との良き交流の場になったと思います。

この大規模なイベントを成功させることができたのは、前期の内から活動していた実行委員会の努力と汗の結果だと思います。実行委員の仕事は、仕事の量に比べて人数が少なく、夏休みも活動し、後期は毎日のように夜遅くまで残り、準備を進めました。更に当日は、あちらこちらにかけずり回り、本当に疲れました。しかし、各参加団体の協力もあり、大きな問題も起きず成功させたことは、自分たちにとって大きな自信となりました。陰で支えて下さった関係各位、教職員の方々にも感謝いたします。

みなさん、来年で風花祭も七回目をむかえます。まだ歴史が浅い風花祭は、回を重ねるごとに少しずつ成長しています。来年は今年よりも更に楽しいものになるでしょう。今年参加した人はもちろん、参加できなかった人もぜひ、足を運んでみてください。

▲実行委員の方達。左側が委員長の佐藤裕樹さん。

KaZaHaNa

▲服屋さん。開店準備中。

▲言語の学生による肉じゃが。

▲海外研修活動の時のことを展示していました。

▲たくさんの人が訪れています。

▲ダンス部による公演。

学生の声

医療福祉学科
シニア体験コーナー

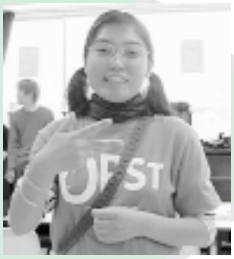
医療福祉学科一年　弓野真希

私は去年、風花祭に来る機会がなかったので、今回、受験生やお子さん達に福祉の事を紹介できて良かったと思っています。出店も結構たくさん出ていて、私自身も楽しかったです。

医療福祉学科一年　田島飛鳥

中学生の方も来てくれて、早い内から進路を考えているんだなと感心しました。私が所属しているサークルでもお店を出していますが、別に係りとかじゃなくても自主的に参加してくれる人も多くいて、盛り上がってるんだなと思います。

看護学科二年　前田依里



今回、私達が演じた劇は「シンデレラ」なんです。私達は、普段手話サークルとして活動してますけど、みんなまだ手話の勉強を始めたばかりなので、ほとんど手話は分からないという状況でして、とても難しかったと思います。でも、今回一年生が二ヶ月間、一生懸命練習したこともあり無事終わらす事ができました。とてもうれしく思っています。

▲Ｆ１０１では、大谷総長による講演も行われていました。ご覧の通りの大盛況でした。

▲入試や本学に関する相談室も設けられ、多数の受験生とその親御さんがおいでになりました。

海外研修活動の報告会が行われました。写真はその時の特別講演の様子です。

人形劇です。お子さんと一緒に楽しんでいるようです。

▲吹奏楽部の演奏。満員です。

▲チアリーディング部によるステージイベントでした。

▲お店で何かを選んでいるようです。

▲言語聴覚障害学科の展示室。

▲琴と三味線の演奏会です。

▲最終日の夜。ステージでは、たくさんの公演が行われました。

大学院研究計画発表会　報告

去る十一月三日に平成十三年度大学院修士課程一年生の第一回研究計画発表会が開催されました。大学院は、本年度から東京、福岡、柳川と大田原の四ヶ所で遠隔授業を始めたこと、医療福祉経営専攻の修士課程が新たに発足し院生数が増えたことなどを踏まえ、四キャンパスを各々Ａ・Ｂの会場に分け中継し、同時進行することにしました。

各キャンパスからの先生方の熱心なご指摘、ご助言などを戴けたおかげで、時間はやや延長いたしましたが六十二題の発表も無事終了しました。終了後各々懇親会が開かれ、院生相互や先生方との交流を深める一助にもなったと思っております。ご多忙の中、ご出席いただき院生を激励していただきました先生方のご支援に心からお礼を申し上げます。なお十二月二十五日（月）に保健医療学専攻博士課程の計画発表会を予定致しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

（初山泰弘）

▲このように、テレビを使い四つの場所を同時中継しました。

大田原キャンパス

大田原キャンパスからは、看護学分野四名（Ｂ会場）、理学療法学分野十九名（Ａ会場）、作業療法学分野三名（Ｂ）、言語聴覚障害学分野一名（Ｂ）、放射線・情報科学分野一名（Ａ）が発表に参加しました。教員も各分野より参加。限られた時間内ながら、活発な意見交換と助言・提案が行われていました。両会場ともほどほどの混みぐあい、通信機器も概ね好調、時間進行もほぼ予定通り。まずは順調な会議運びでした。（プログラム、質疑応答内容その他は四キャンパス共通なので、ここでは省きます。）

終了後の懇親会は一階ロビーで、Ｍ一の有志、高田、高橋、黒崎さんが幹事を引き受けてくれて実現しました。院生、教員、共にしばし歓談。真面目部分の発言は、終わってほっとした、助言を糧に今後頑張りたい、もっと講評を聴きたかったなど。一部に、日頃もっと緊密な指導を受けたい、というのがありました。このたびの報告会はどの院生にとってもよい節目になった、というのが、一部始終を見ていた者の感想です。

（鎌倉矩子）

東京サテライト教室

東京教室へ参加した正確な人数は把握しなかったが、Ａ教室、Ｂ教室とも二十名程度であった。定刻までは教員も学生もあまり見かけず、東京教室の発表は午後ということもありどうなるかと思ったが、始まる時間にはそこそこの人数が集まった。

発表者の所属の関係などで、Ａ教室には主に理学療法学、放射線情報学、福祉援助工学などの関係者が集まり、Ｂ教室には開原成允副学長、医療経営管理学、医療福祉学の関係者が集まり、建設的な討議が行われた。

東京教室に学ぶ大半の院生は就業しており、Ａ、Ｂ教室共に日々の仕事で直面している問題から研究テーマを選んでいるようであった。全体に学生からの質問は必ずしも多くは無かったのだが、自分の経験を元にして疑問を投げかけるのは東京教室の特徴だったのだろう。

発表会後の懇親会には理事長も参加され、院生、教員、職員全体が一同に会し楽しく歓談できたのは大変良かったと思う。

（田中　繁、岩下清子）

全国四都市で大学説明会開催される

十月二十八日の東京（山王病院三階ホール）を皮切りに、地方入試会場の開催地である四都市（東京、福岡、仙台、名古屋）にて、学生募集活動の一環として大学説明会を実施いたしました。

東京地区ではあいにくの雨模様にもかかわらず、予想を上回る約一五八名もの受験生らが来場し、用意した椅子が足りなくなるほどの盛況となりました。センター試験利用入試の導入をはじめ、視機能療法学科及び介護福祉士コース（医療福祉学科）の開設といった入試に関する変更点も多くあり、受験生や保護者、高校・予備校の進路指導ご担当の先生方がブースで熱心に相談されている姿が印象的でした。また当日は山王病院の見学や、開原副学長による「ＩＴが変える医療」と題した特別講演も行われ、受験生以外の一般の方々や東京地区の同窓生、教育後援会員の方々にも好評を博しました。

会場を健保会館に移しての懇親会では、高木理事長より、これを機会に東京地区の本学関係者の結束をさらに固めてゆこうとの呼びかけがあり、賛同の拍手が響き渡りました。

（小峰辰也）

ライカ研究奨励賞　受賞

この度、本学医療福祉研究科一年生の霍明さんがライカ研究奨励賞を受賞されました。ライカ研究奨励賞は、日本に研究留学している外国人をサポートするために、ライカマイクロシステムズ日本支社が五年前にはじめた奨励賞です。ライカ賞は今年で第六回目になり、今回、本学の霍明さんとお茶の水女子大学理学研究科二年生の李文萍さんが受賞されました。この受賞が励みになり、霍明さんの研究が今後ますます発展していくことを期待しております。

（黒澤美枝子）

出来事

「ことばの遅れセミナー」開催される

那須からの紅葉の便りが届き始めた十月十三日(土)に、言語聴覚センター主催による「ことばの遅れの理解とその支援」セミナーを開催しました。例年夏期に催してきたものですが、今回は準備の都合で十月の開催となりました。

プログラムは斉藤佐和子氏(旭出学園教育研究所)による「マカトン法について」、田中裕美子氏(言語聴覚障害学科)による「最近の言語発達研究のトピックについて」、畦上恭彦氏(言語聴覚障害学科)による「インリアル・アプローチについて」の三つの講義でした。

当日は一般百三十三名、学生四十二名と予想を上回る参加があり、子どもの言語障害についての関心の高さが伺われました。また、参加者は教員・保健婦・看護婦・指導員・保育士・心理士・保護者・学生など他職種にわたり、栃木県全域からの参加があり、本学及び言語聴覚センターへ寄せられる期待の高さが感じられました。アンケートには継続した開催を望む声が多くみられました。一層の内容の充実を図り、今後も地域のニーズに応えて行きたいと思います。

(畦上恭彦)

廣瀬輝夫先生本学来訪

十月三十日に世界的に活躍されている心臓外科医の廣瀬輝夫先生が本大学の谷学長と開原副学長を訪ねて来られました。

廣瀬先生は心臓バイパス手術の発明、無血手術法の確立、さらには今までに手がけた手術はおよそ三万件という輝かしい業績を持っておられます。

今回、医療経営管理学科の高橋泰先生が廣瀬先生とお知り合いだったということもあり、一緒に大学を案内しながら、お話を伺うことができました。

先生はニューヨークにお住まいで、七十五歳という年齢にはとても見えず若々しくとても気さくな方でした。

話の内容でアメリカと日本の医療の違いや心臓バイパス手術のお話は非常に興味深いものでした。他にはニューヨークにお住まいということもあり、テロ事件の生々しいお話も聞くことができました。話による と、ビルの粉塵が四マイル(約六、四キロ)離れた場所まで飛んできたそうです。

そのような医療以外のお話も伺うことができ、とても貴重な経験となりました。

(医療経営管理学科三年　高田和憲)

理学療法科学学会 第二十九回学術大会

去る十月二十七日(土)、本学において理学療法科学学会第二十九回学術大会が開催された。今回は、PT協会の内部障害専門領域研究会と共催で行われた。会員、学生合わせてほぼ二百二十名の参加であった。

午前の研究発表は、八題であり、うち本学の修士院生二題、博士院生二題の発表であり、活発な質疑応答が交わされた。また、午後の特別講演は、聖マリアンナ医科大学付属病院の山田純生先生による、「運動負荷試験の臨床応用」及び滋賀医療技術専門学校の砂川勇先生による「徒手的理学療法の今後」と題した講演が行われた。お二人とも、多忙な日々のお疲れを大田原温泉で癒していただいた。

第三十回大会は、平成十四年五月に埼玉医科大学短期大学に於いて行われる予定である。

(大会長　黒澤和生)

学生相談室

学生相談室
L棟1階
開室日時　月・水・金曜日
10：00～17：00
ご利用ください

十月より、相談室のカウンセラーが二人体制となり、相談に来られる方も少しずつ増えてきました。相談内容は、心身の状態、進路への迷い、友人関係、また自分自身の理解を深めたい・・・など様々です。

学生相談室は、学生生活を援助することを目的に運営されており、決して特別なところではありません。来談のきっかけや問題は人それぞれですが、自らの問題に取り組むことは、その解消のみならず、自己発見、自己成長につながるプロセスを歩むことでもあります。相談室では、一人一人時間をとって、じっくりお話をお聴きし、一緒に解決法を見出していきたいと考えています。また簡単な心理テストを用いて、自分を客観的に見てみようという試みも導入しました。なお面接は予約制で、個人の秘密は守られますので安心していらして下さい。まずは休み時間にでも、どんなところか、またどんなカウンセラーか見にいらっしゃってはいかがでしょうか。

今回はカウンセラーの自己紹介を少し。

木下愛子(きのしたあいこ)　月・水・金曜日担当

昨年から相談室のカウンセラーとして学生の皆さんとお会いしています。今思う事は、皆さんすてきだなということです。そして、ともに成長していけたらと考えて過ごしています。現在二十代後半。マイペースが長所であり短所かもというのが、現在の自分自身についての認識の一つです。

小林真理子(こばやしまりこ)　水・金曜日担当

今年の三月に栃木県北に転居し、十月より相談室の非常勤カウンセラーとして勤務しています。その前は東京都の研究所と病院で、幼児から成人までの方々を対象に心理臨床の仕事をしていました。現在三十代後半、趣味は旅行と絵を描くこと(今は忙しくてお休み中)。学生の皆さんの若いパワーをいただきながら、元気にすごしたいと思っています。

リレーエッセイ

看護学科
中村　勝

『ＮＰＯって何？』

昨今、“ボランティア活動”が随分と社会に根付いてきた印象を受ける。それは私が今年から始まった栃木県ＮＰＯ条例作成懇談会に参加するようになったこともあるが、他県の視察をとおして本県のそうした活動が不足していることも知った。一般的には「非営利市民活動団体」と紹介されるＮＰＯだが、ＮＧＯとの違いや細かな概念づけは一部の専門家に任せておけばよいと思う。ただ、私たちが時代に沿った意識としてもっておくべきだと思うのは、地域の問題は地域の人たちによってきちんと把握されているべきで可能なかぎり合意のうえで住民の活動力によって問題解決のための努力が払われるべきだということである。しかしそうは言っても個人の能力には限界がある。そこで行政や資金を出す企業、意欲や技能をもつ人材が必要となってくる。いかがですか？　行政とは住民の声を反映させてこそ真価を発揮し、地域に貢献しようとしない企業には発展できない環境をつくる。自立したコミュニティは個人の責任も問われる。しかし互いの弱さを補い合う社会だといえる。次回執筆者：豊嶋三枝子（看護）

私が感銘を受けた本

第14回

紹介者：山﨑せつ子

書名：坂の上の雲
著者：司馬遼太郎
出版社：文芸春秋

これは大学生時代の夏休み、父の部屋から暇つぶしに持ち出した本のひとつです。日露・日清戦争を描いた小説ですが、歴史小説の魅力は私にとって、世界規模の雄大さと一個人の繊細さ、逆らい難い必然と歴史をも動かす偶然など両極の錯綜です。でも、そんな歴史ロマンをも吹き飛ばす驚きをこの本は私に与えてくれました。ロシアの名将クロポトキンはその卓越した頭脳が災いして判断を誤ったというのです。詳細な観察、的確かつ機敏な判断が導いた大敗！大局をみることの難しさと大切さ！

多感な頃の思い出です。

****

図書館の大谷総長著書の右側の書棚に置きます。
ご愛読下さい。（図書館長）

教員紹介

①所属・職位②生年③出身校④専門分野⑤直前の勤め先
⑥主要著書または論文⑦本校における担当科目⑧趣味

西川　潤一（ニシカワ　ジュンイチ）

①放射線・情報科学科　教授
②昭和 20 年 1 月 22 日
③東京大学医学部医学科　昭和 46 年卒
④放射線科全般、特に核医学
⑤東京大学医学部附属病院分院
⑥心臓ＭＲＩテキスト
南江堂　1998. 11
⑦核医学検査学Ⅰ及び核医学検査学実験
⑧ゴルフ、旅行、グルメ

菊地　優子（キクチ　ユウコ）

①医療経営管理学科　助教授
②昭和 28 年 12 月 2 日
③ローマリンダ大学
④診療情報管理
⑤日本コーディングセンター
⑥ ICD-9-CM 手術・処置マニュアル
⑦診療情報管理コース
⑧スキー、スケート

小川　景子（オガワ　ケイコ）

①看護学科　助手
②８月 10 日
③フェリス女学院大学
大学院人文科学研究科
④母性看護学
⑤神奈川県衛生看護専門学校
⑥「近代神奈川県における助産の歴史
－制度・教育・助産活動の実際－」
⑦臨床看護実習、看護技術演習
⑧旅行

連載コーナー

私の研究ノート

放射線・情報科学科　冨沢比呂之

私の研究テーマは、ニトロシル-ルテニウム錯体の合成とその性質です。これだけですと「何の事やら」というのがほとんどの方々の感想ではないでしょうか。

若い頃は「ご専門は？」という質問に、研究内容を分かってもらおうとムキになって説明していました。その結果は、むっとされるか、あるいはあきれ顔で「もう結構です」のどちらかでした。最近は、「ご専門は？」の質問に「化学です、サイエンスの科学ではなくバケる方の化学です」といいますと大抵の方は「ああ、そうですか」とか「なんだか難しそうですね」とかであっさりと会話が終わります。このようにどちらかというと嫌われ者の「化学」が私の研究領域です。

ニトロシル-ルテニウム錯体とは一酸化窒素とルテニウムという金属の化合物の総称です。一酸化窒素は酸性雨、オゾンホールなどの原因物質として、また生体内での血管拡張作用や神経伝達物質として注目されています。一方、ルテニウムという金属は多種多様な化合物を作り、その化合物の反応性も非常に変化に富んでおり、たとえば名古屋大学の野依教授は不斉合成用の触媒としてこのルテニウム錯体を用いて成功を収め、本年度のノーベル化学賞を受賞しました。この一酸化窒素とルテニウムが出会うと一種独特の性質を示すニトロシル-ルテニウム化合物群ができます。それが、私の研究対象の一つです。

エチレンジアミンという有機物が結合したニトロシル-ルテニウム錯体をマイナス200℃まで冷却して緑色のレーザー光を照射しますと、錯体の一部の構造が変化することが分かってきました。この変化した構造は温度が低ければレーザー光の照射をやめても保たれていますが、温度を上げたり赤い色のレーザ光を照射しますと元に戻ってしまいます。構造が変化した状態を我々は光誘起準安定状態と呼んでいますが、このような現象は将来、レーザー光を用いた電子デバイスへの応用が期待できるため、この現象の解明と新たな化合物の合成が近年の私の研究テーマです。実はこの研究は、私が合成した化合物に異分野の専門家の方々が興味を示してくれたことから始まったものです。現在は専門の異なるいくつかのグループに分かれ光誘起準安定状態の研究を進めていますが、外国のライバル達も出現したため彼らに追いつかれないようにがんばっているところです。

ニトロシル-ルテニウム錯体以外にもルテニウム錯体や他の金属錯体についても共同研究を行っておりますが、ここでは割愛させていただきます。また、こちらの大学に来てからは化学からは少し離れたＸ線撮影に関係した研究も始めました。この研究については学内研究発表の場で発表させていただいておりますので、もし興味がおありでしたらお聞き下さい。

どうでしょう？やっぱり「なんだか難しそう」だったでしょうか？化学も結構面白いものですよ。

お知らせ

学生課から

冬休みに入りますがこの時期は飲酒の機会が多くなります。一気飲みによる急性アルコール中毒や飲酒運転、帰宅・帰省の際の交通事故に十分注意しましょう。

また冬山登山などの活動を行う際には、登山計画を地元警察署に必ず提出し、ケガや遭難などの事故を起こさないよう、手続きを怠りなく行ってください。

そして一月には万全の体調で実習のまとめや後期試験に臨んでください。また四年生の皆さんは国試対策にも努力して、無事卒業できるようすごしてください。

（大野節夫）

第５回 国際医療福祉大学 ダンス部公演

～ Dancing Collection '01 ～

毎年恒例のダンス部公演も今年で五回目を迎えました。今回は毎年出演していただいているヒロコダンススタジオの方々や、昨年引退した四年生方に加えて、卒業生の方々にもゲストとして出演していただくことになりました。

第一回からご覧になっている方も、今年が初めてという方も楽しめる、踊るあほぅたちによる九十分間。その、今までにない型破りなステージをどうぞご覧下さい。

日にち：１２月１５日（土）
場　所：那須野ヶ原ハーモニーホール
時　間：昼の部　開場１４：００
　　開演１４：３０
　　夜の部　開場１８：００
　　開演１８：３０
料　金：７００円

チケットのお買い求めは、大学購買部、ＴＳＵＴＡＹＡさん、またはお近くのダンス部員まで。

同窓会「マロエニ会」入会案内

本会は、同窓生相互及び大学、学科との啓発・親睦を図り、併せて国際医療福祉大学の発展に寄与していくことを目的としております。

卒業生、在学生の皆様には、本会の趣旨をご理解いただき、入会手続きをお進め下さいますようお願い申しあげます。

《ご入会のお申込み》

入会をご希望される方は、下記までご連絡下さい。本会専用振込用紙（郵便局、銀行）をお送り致します。

また、大学及び同窓会事務局に登録されている現住所等に変更がある場合も同様にご連絡下さい。

◆◆同窓会「マロニエ会」連絡先◆◆
国際医療福祉大学同窓会「マロニエ会」事務局〔大学Ｌ棟学生課内〕
電話：０２８７－２４－３００３／FAX：０２８７－２４－３１４０
e-mail：office@maronie.iuhw.ac.jp

部会・委員会報告

◇紀要委員会

第七回紀要委員会を十月二十四日（水）に開催しました。前回の本欄の続きとして、今回は論文審査側の注意事項を記述します。論文の審査は内容に最も近い専門家によって行われます。審査では研究の独創性、結果の信頼性、論文の形式などの規定どおりの評価は勿論ですが、原稿に対する修正や著者へのコメントは全て初審のときに提示することが原則です。再審以降での新たな要求はいけません。また内容不足に対する研究の追加請求もいけません。修正意見は原稿に書かれた内容に対するものに限定すべきです。審査員は高度な権限を有し、著者は絶対服従の立場にあります。

（野原功全）

◇臨床教育小委員会

全学科共ただ今、集中実習中

後期は各学科、特に三年生・四年生達が集中実習に励んでおります。学生、教職員も共に朝早く大田原を出発し、星空を仰ぎながらの帰宅でありましょう。

風邪気味の方も見られますので、各自個人衛生や健康管理に努め長期間の実習を乗り切りましょう。

この様な現状を踏まえ九月二十七日（木）の小委員会では、「実習指導上の諸問題」について

①実習中の施設利用について確認し、複数学科が重複する場合の対応及び実習環境の調整に関して。

②定期試験前後のスケジュールについて確認し、実習期間と再試験期間が重なる場合の当該学生に対する調整に関して。

③実習施設の追加、変更に係る文部科学省への申請に関して。

等の事項を検討しました。

多事にわたる施設での実習を体験し、学生達は一段と大きく成長される事でしょう。

（齋藤恵子）

◇国際部・国際交流委員会

一、平成十三年度海外研修・ボランティア活動参加学生の反省会が九月二十八日、全学生向けの報告会が十月十五日にＥ一〇一教室で開催されました。多数の聴衆に詳細にわたる活動の様子が披露されました。風花祭でも展示、バザーをＥ二〇二・二〇三教室で行いました。

二、「第三回青年海外協力隊帰国報告会」が風花祭特別企画として「ＯＢ会」本学共催で十月二十日開催されました。テーマは「発展途上国におけるプライマリーヘルスケアの実状」、マラウイ派遣ＯＢ二人による報告と、宇都宮済生会病院で研修中のケニア保健婦オウマさんの特別講演で、示唆に富む報告でした。

三、千保大田原市長と留学生の懇談会が十月二十五日開催され、意見や要望を聞いていただいたり、楽しく交流する機会を得ました。尚、市の好意により市営住宅が提供され、五名の留学生が入居しました。

四、留学生との懇親会が十月三十一日学内で開催され、学長、留学生、ホストファミリー、関係教職員が出席し、近況報告を聞いたり、歓談を楽しみました。

五、足銀留学生奨学金が陳暁青さん（ＰＴ一年）に授与され、授与式が十月二十二日足利銀行本店で行われました。

六、大学院生霍明さんにライカからライカ研究奨励賞・研究補助金が授与されました。

七、ＪＩＣＡケニア医療技術教育強化プロジェクト研修員として、ＫＭＴＣ看護学部教員Ms. Mary Wairimu KARIUKI が十月一～十七日、本学看護学科と情報教育センターで研修を受けました。十二月十日から約二ヶ月、再度本学にて研修の予定です。

八、ＪＩＣＡ主催「アジア・アフリカ地域国際寄生虫対策ワークショップ」参加者（十二国、十七名）が随行者と共に来学し、大学についての紹介を受け、学内施設、リハビリテーションセンターの視察をしました。

（山崎統四郎・田中美子）

◇ボランティア委員会

十月十六日、ボランティア委員会を開催。①九月一日開催した「大田原ボランティアの集い」の報告、青年会議所で集いのホームページが開設されたこと、②学外からのボランティア募集七件への対応について協議、③学生のボランティアサークルの動向として十四年度は本学において栃木県学生ボランティア・ネットワーク集会の開催決定したことが報告された。

また④IUHWボランティアセンターからの報告として、現在一四〇名の学生が登録し、二つの施設でボランティア活動に参加しているが、大学祭には利用者をできるだけ参加してもらうためボランティアが準備をすすめていることなど報告協議された。（鈴木五郎）

◇就職委員会

十一月六日に就職委員会を開催しました。十月末現在での求人数は各学科とも昨年を上回り、合計で三六九〇件（昨年二九五三件）、二九二五人分（昨年一七四六八人）と大幅に増えています。この数字には一般企業からの求人も含まれてはいますが、就職難の時代に求人が増加しているのは喜ぶべき状況です。「情報がない」という声がありますが、こうした情報が有効に利用されていないように感じられます。求人情報はL棟（大学院棟）一階の就職情報コーナーで月～金（九時～十七時三十分）、土（九時～十二時）の時間に公開しています。この情報と、各地の「福祉のしごとガイダンス」や新聞の情報などと合わせて、是非十分に活用してください。（就職委員会）

◇教務委員会

研修会報告

日本私立大学協会主催の第十三回大学教務部課長相当者研修会が、平成十三年十月十七日（水）から十九日（金）の期間で幕張にて開催された。本学からは渡辺教授（看護学科）、石田事務部長、樺澤教授（情報教育センター）が出席した。研修会は、三題の講演を取り巻く諸情勢について

一．私立大学

二．大学教務部課長相当研修会の研修目標と

三．グローバル化時代の私立大学―国際対話能力の育成を目指して

と「多様化する学生への教育対応を考える」というテーマでパネルディスカッションが行われた。また、協会が行った「大学教務に関する実体調査」の報告が行われた。

二日目の午後と三日目の午前中に、班別（十一グループ）に分かれ、各班ごとにテーマを決めディスカッションを行った。

三日目（最終日）の午後に「学生の潜在能力の伸長を促す教育―高校からの早期入学者への教育対応」というテーマで講演が行われ閉会となった。

講演では、行政改革（特殊法人見直し）、国立大学の法人化や大学評価などについての解説や国際的対話能力を持たせるための大学の役割などが興味深く聞けた。

パネルディスカッションは、高校教員サイドから、ゆとり教育にともなう学力低下問題、入学選抜（入試科目、AO入試など）の問題、高大連携のありかたがパネルとして取り上げられ活発な討議が行われた。「一年次教育（導入教育）のあり方」というパネルでは、アメリカの補習教育やRetention（定着）教育などについて、関西国際大学の濱名教授の問題提起があり活発なディスカッションが行われた。

グループ別検討会は、理工系の班に入ってディスカッションを行ったが、検討テーマは、学力低下、履修制限、教職課程、退学・留年対策、習熟度クラス編成、GPA導入などが取り上げられ、各大学の例を挙げ熱心な討議を行った。全体として、私立大学の置かれている現状や問題、話題になっている事項などが講演・検討テーマとして取り上げられており実り多い研修会であった。（樺澤一之）

学科・センターだより

◇大学院

十一月三日（土）の文化の日、大田原・東京・福岡・柳川校をつなぐ遠隔授業システムを使って、修士課程一年次生（博士前期課程一年次生を含む）の研究発表会が行われました。A、B二教室を同時に用い、全部で六十六名が、この半年をかけて作ったそれぞれの研究計画を発表。聴衆から、ときに優しく、ときに少々辛口の批評や助言を受けました。

中には計画書作成よりさらに進んで、データ収集や分析の一部に進んでいる院生もありました。初山大学院長によれば、去年よりはるかに進捗状況がよく、発表内容も格段によくなっているそう。通信機器の具合もほぼ好調で、無事務めを果たしてくれました。

終盤には東京キャンパスから理事長が参加されるというハプニング（？！）があってちょっと湧きました。今後ますます大学院教育の充実を図っていきたいという理事長メッセージも受けました。そして開原副学長の音頭で乾杯！メディアを介しての乾杯は、たぶん誰にも初めてだったことでしょう。

一年後には同じメンバーが研究の最終成果を聞かせてくれる筈。その時が楽しみです。（鎌倉矩子）

◇看護学科

四年生奮闘記

―地域看護実習に寄せて―

九月から始まった四年生の地域看護実習もいよいよ終盤を迎えました。

「見学だけでなく体験を」を合い言葉に県下十七施設（健康福祉センター・市役所・役場等）で四年生の自分への挑戦が始まりました。住民の方を前に初めての健康教育。企画から運営まで自分達で計画。さあー本番。今までに習った知識を総動員し、工夫をこらした資料を片手に、自分たちの力を出しきりました。

「住民の健康を守るとは」「地域で人が暮らすとは」という課題にそれぞれが、体当たりでぶつかり自分の答えをみつけて帰って来た地域看護実習でした。

家庭訪問、乳幼児健診、子育て支援等々、色々な活動を体験。実習しやすい環境を作って下さり、時には厳しく時にはやさしくご指導いただいた保健婦さん。専門家であり続ける事の難しさ、やりがいを心と体で実感した事もかけがえのない体験となりましたね。

就職試験、国家試験も地域看護実習でみせた情熱とパワーで乗り切ってくれると信じています。紅葉の季節到来と同時に、ちょっぴり大人になって帰ってきた四年生を頼もしく思う今日この頃です。（阿部知恵子）

◇理学療法学科

十一月七日（水）にF一〇一教室にて今年度の理学療法学科卒業研究発表会が開催されました。運動学、運動心理、運動生理学、生理学など基礎から臨床のテーマに関する三十演題が発表されました。すべての発表はコンピュータプレゼンテーションにより行われ、発表技術とともに内容的にも年々充実してきているように思われました。活発な質疑応答が行われ、四年生だけでなく二、三年生にも有意義な機会となったようでした。新学長をはじめ多くの教員のご臨席をいただき、厳粛かつアットホームな雰囲気で発表会が進行し、窓のないF一〇一教室を出ると夜になっていました。（齋藤昭彦）

◇作業療法学科

四年生、総合実習です！

十月二十九日から始まった六週間の総合実習。この臨床実習のときほど、一人の患者さんについて、ひたすらに考えることはないのではないかと思います。臨床実習でお世話になる方々は、我々が作業療法士になって仕事をはじめてからも、決して忘れることのできない人になると思います。それほどに大切な体験学習なのです。目の前の患者さんに最善を尽くしてください。大田原のキャンパスで学んでいる諸君も、四年生が帰ってきたら、その濃密な体験談に耳をかたむけるとよいでしょう。（濱口豊太）

◇言語聴覚障害学科

言語聴覚障害学科では、大学祭で企画を行いました。ことばやきこえについての検査用具や機器の説明・展示の他に、「癒やし声の分析」「顔の左右差の判定」「後出し負けじゃんけん」「大声コンテスト」などの思考をこらした企画が盛り沢山でした！また、今年は学科の企画の他に、本学科学生がボランティアを行っている那須ひまわり会やほほえみセンターの方々による手作り作品の展示なども行いました。いらした方々に丁寧に説明を行う学生の表情から生き生きとした様子がみられ、盛況の中二日間が過ぎました。企画を通じて、学内外の多くの方々に学科の特色を知って頂くことができたのと同時に、学生同士で考え作り上げていく過程で互いの絆も深まったのではないかと思われます。物事に真剣に取り組む姿勢を忘れずに、今後も目標に向かって頑張っていきましょう！（吉川千絵）

◇放射線・情報科学科

教育後援会 学科別懇談会

例年のように風花祭にあわせて十月二十日（土）に開催され、当学科では四十三名の保護者の方々が出席されました。

学科の教育基本方針、国家試験、就職状況についてご説明したあと、熱心な質疑が行われました。

今年から、大学説明会が東京（十月二十八日）、福岡（十一月四日）、仙台（十一月十日）、名古屋（十一月十一日）でも開催され、この機会にも同窓生・教育後援会の方々にお集まりいただき教員との懇談のときを持つことができました。

保護者の方と教員とのコミュニケーションも大切にしてゆきたいと思っております。

（飯沼一浩）

◇医療経営管理学科

就職活動たけなわ

四年生の就職活動が盛況を迎えています。すでに民間企業を希望する学生は、昨年の冬からインターネット等を通じて情報収集をした後に就職活動を行い、夏までにおよその学生が就職内定までこぎ着けることができました。東京やその他の大都市の求人は、このように比較的早く動きます。

一方、病院の大手や有名どころは、夏から求人が始まります。これも「一発勝負」に万全を期すもの、以前から決めていた病院に「インターンシップ」で入り込み、事務職員に好印象を持ってもらうものなど様々です。秋口からはその他の医療機関、介護福祉施設等の求人が始まり、まだ未定の四年生も本格的に活動を行っています。

昨年に比べ、救いがあるのは、本学科の卒業生を指定してくる医療機関がでてきたこと、昨年就職した本学科卒業生が優秀なので、本年も採用したい、という申し出があることです。

みんな希望の就職ができるよう祈っています。ただ卒論作成もしっかり行ってください。

（矢野 聡）

◇医療福祉学科

四年間の集大成「卒業論文」完成へ

十一月十五日、医療福祉学科四年生は、それぞれの研究テーマをまとめた卒業論文の提出日を迎えました。四年間、講義やゼミ、実習を通して、自分なりの「福祉観」を養い、ソーシャルワーカーとしてのあり方を見つけてきた日々を、自分の言葉で形にしていく集大成としての作業になりました。「何となく思っていること、感じていること」を読み手に分かるように表現することの難しさ、論旨を展開する構成の難しさをはじめ、文献一覧の正式な書き方など、一つ一つの課題に取り組むことになりました。締め切り間近には、随分疲れた様子を見せていた学生も、きっとこの過程を経て何かを掴み、今後の進路において一つの自信となることを願っています。

（岩本 操）

◇言語聴覚センター

補聴外来

当外来には、乳幼児から高齢者まで幅広い年代の方が訪れます。

補聴器の装用には聴力の程度、聴力型、言葉の聴取り等聴こえの状態を詳しく調べ、各々の状態は多様ですから個々に合った器種の選択や調整を行います。家庭や職場での試聴と評価を繰り返しながら最適な状態に調整します。乳幼児ではご両親へのガイダンス（両親講座）を併行して総合的なリハビリテーションを行うことになります。

高齢者の中には「補聴器は持っているがうるさくて使えない」という訴えがありますが、専門家による調整指導により装用可能になる場合も多いようです。

（鬼越美帆・廣田栄子）

◇基礎医学研究センター

進化をリードしたのは男？女？

人間の染色体は二十三対で、うち二十二対は性に関係なく男女共通にもっている常染色体です。残る一対が性決定の役割を持ち、女性はＸ二本、男性はＸ一本とＹ一本です。よって男になるにはＹが必要らしいが、ＹはＸに比べて著しくサイズが小さく遺伝子の数も少数で無意味な部分が多い。この貧弱なＹ染色体ですが、実は人間の進化をリードしてきたらしいのです。進化は精子や卵子が分裂する時に起こる遺伝子の自己複製のミスによる、いわゆる突然変異によって起きます。男性のＹと女性のＸの違いを利用してＹとＸの突然変異の蓄積の差を導きだしたところ、男性の突然変異が女性の一．七倍も多かったのです。「原始、女は太陽であった」と平塚らいちょうが高らかに謳ったのは分子生物学的に正しかったが、Ｙの方も一生懸命役に立ってきたことも事実のようです。「男って駄目ね」と言われたら、これは使えそうですが、後の展開がどうなっても知りません。

（嶋田裕之）

◇健康管理センター

インフルエンザ流行の季節がやってきます

インフルエンザの流行は毎年十二月から始まり一月・二月にピークとなります。インフルエンザウイルスは抗原性の違いからＡ、Ｂ、Ｃ、の三型があり、Ａ型とＢ型が流行を示します。Ａ型は粒子表面の二種類の糖蛋白の突起によりいくつかの亜型が存在し、現在ソ連型と香港型が主流ですが、小変異を起こしては流行し続けています。インフルエンザはふつうのかぜと違って三十九度以上の発熱を起こし、筋肉痛・全身倦怠感などの全身症状が強く、多数の人を巻き込みます。流行時には人混みを避け、うがいや手洗いを励行し、疲労のないように気をつけましょう。予防ワクチンは毎年ＷＨＯの推奨する株を基本にして作られます。

（谷 禮夫）

広報委員会からお願い

表紙に使いました写真の中のかわいらしいお嬢ちゃんのご家族の方、あるいはお知り合いの方、よろしければご連絡下さい。表紙の写真を差し上げます。

連絡先：国際医療福祉大学
情報メディア室
電話番号：０２８７―２４―３１９３
担当：見目

IUHWクイズ ～第28弾～ 当選者発表

さて、今回の問題はいかがだったでしょうか。前回、正解者がいなかったので今回は当選者は二名とさせて頂きました。そして、運良く当選された方達は、放射線・情報科学科４年生の木村香緒里さん、同じく１年生の日崎翔さんです。おめでとうございます。学生証持参の上、Ｌ棟の学生課までお越し下さい。

1．花火のルーツは紀元前3世紀の古代中国、火薬の基本となる硝石（硝酸カリウムの通称）が発見されてからと言われています。おもちゃ花火（がん具煙火というそうです）については、1659年、大和の国（現奈良県）から江戸に出てきた弥兵衛という人（初代の「鍵屋」）が、ワラの管の中に火薬を入れた初歩的なおもちゃ花火を考え売り出し、江戸庶民に爆発的な人気を得たと言われています。＝正解　b

2．打揚げ花火（打揚煙火というそうです）は、大きく分けて2種類あります。一つは、菊のように球形に開く「割物」。もう一つは、花火玉が上空で二つに開き、中から星などが放出する「ポカ物」です。＝正解　b

3．打揚げ花火は、開いた実際の形によってさまざまな種類に分かれます。代表的な物には例えば、次のようなものがあります。菊、牡丹、柳、大柳、椰子、土星、滝、小割、スターマイン、蝶々など＝正解　c

4．花火（煙火）の打揚げに従事するためには、煙火打揚に関する保安教育を受けて、業界の自主保安制度である「煙火打揚従事者手帳」の交付を受けることが必要。この手帳の発行および従事者の技能の証明は、社団法人日本煙火協会が行っています。社団法人日本煙火協会は、旧・通商産業大臣の許可を得て昭和３７年５月に設立された団体です。＝正解　d

以上、社団法人日本煙火協会ホームページ（http://www.hanabi-jpa.jp）を参照。

解答
1＝b
2＝b
3＝c
4＝d

国際交流 in 大田原

さて、今回は大田原市の産業文化祭に出店していたESSというサークルの部長、阿久津真弓さんに偶然お話を伺うことができました。

―まず最初に自己紹介をしてもらえますか？

医療経営管理学科三年の阿久津真弓です。

―今回、どうして産業文化祭に出店しようと思ったのですか？

今回というか、去年も出しています。地域の人と交流できるのは、こういうときだろうと思いますから。

―どうやらドーナツを販売しているようですが、これにした理由などはあるのですか？また、売れ行きはいかがでしょう？

去年もやっていたから、というのもあるんですけど、よくちっちゃい子が来てくれるんですよ。すごくかわいいんです。それに、作るのはそれほど難しくないですしね。

売れ行きの方は、赤字かと思ってましたが、結構売れていると思います。売り上げは、これからの活動資金にします。

―今日、ここに来ている人達で、部員は全員ですか？

いいえ。本当は、全員で四十人くらいです。今回、看護学科の人たちは実習が始まっていますので、来れないというように、学科もばらばらに部員さんがいますから。スケジュールがかみ合わなかったりするんです。

―こういった催しというのは、結構行っているのですか？だとしたら、その目的というのは何なのでしょう？

ハロウィンとかクリスマスの日にパーティをしたりします。あと、たまに土曜日にバスケットボールをしたり。地域の人達や外国の人達を呼んだりして。ゲームをしたり、音楽を聴いたり、英語で会話したりするんです。

こういうことを行う理由っていうのは、まず英語圏の人達のそういった文化を学べますし、それに英語圏の人達ばかりが来ているわけじゃなくて、他の言葉をお話しする人達も来ているんです。基本的に、基準として使っているのが英語なだけで、他の国の言葉にも触れてみたいんです。英語を勉強するだけじゃなくて、自分の為になることを発見しながら英語も勉強する。例えば、文化が違うから外国人の普通と、日本人の普通と違うとか、そういうのを感じたりです。

そうやって、英語あるいは他国語によっての人との繋がりっていうのですか。どんどん友達になっていきたいと思います。周りを過ごしやすくしてみたいんです。

また、今回の様に、全く英語とかと関係のないこういったイベントもやってみて、いろいろな事を自分達で試してみて、吸収できるものがあればそうしたいんです。

もっとも、一番の理由は楽しいからなんですけど。

―そういった活動をしている中で、話したいけど話せない、というような状況はないのですか？

最初は、緊張している人達もいます。話したいけど、話しにいけないという様に。でも、部の他の人が積極的だから、それにのまれてだんだん大丈夫になるんです。

別に、英語だけで会話しているわけではなくて、外国人も日本語を話せるし、日本語で話しているときもあります。お互いに、英語と日本語で会話を交わしながら、それぞれ、自分の学びたいことを学ぶんです。

―皆さんの英語力は、どのくらいなのですか？

それこそ、もう日常会話に支障がないくらいの人から、そうじゃない人までいますよ。でも、目的が一人一人違うので、それに合わせてみんな来ていると思います。

―これまでのお話を聞いていると、地域交流と国際交流を同時にやっているような感じですね。

そうですね。ときどきパーティとかそういうのじゃなくても、大田原に無料の英会話を開いている教会の宣教師の方達が来てくれる事があります。今週も、ユタ州の宣教師の方達と一緒に活動する予定が入っています。

―今までの活動と、これからの活動に対してどういった感想をお持ちですか？

毎日が充実。すごく楽しいです。なろうと思えば友達になれる、という思いもできました。

突然のお邪魔にも関わらず、ありがとうございました。阿久津さんをはじめ、みなさんのこれからの多岐にわたる活躍に期待しております。

▲産業文化祭での風景

編集後記

谷学長のインタビュー記事を掲載することが出来ました。就任されて間もないお忙しい時期であるにも拘わらず快諾してくださり、また国際医療福祉大学にかける抱負をお伺いすることが出来ました。「大学は学生のためにあるわけで、学生を中心とした大学・・・」と話され、また、「学生に対する教育であるということが最初であり最後の目的である」との理念をお持ちであることを、嬉しく感じることができました。

今号は大学祭の特集でもあります。サークル活動等の成果の発表や模擬店など活気を持って行っていました。そのような中にあって言語聴覚障害学科の学生が行っていた電気喉頭や音声分析など専門分野に関係した展示があり、アカデミックな雰囲気を出していました。

（菊地義信）

IUHWクイズ　―第29弾―

今年も残りわずかとなり、もうすぐクリスマスの季節ですね！ということで今回はクリスマスに関係したクイズです。解答用紙に答えを記入したら、切り取って事務局窓口外側にあるメールボックスへ投入して下さい。正解者のなかから抽選で1名の方に旅行ギフト券をプレゼント。応募資格は本学の学生で、1人1通、締切は12月21日です。

問題

1. 　クリスマスツリーの発祥の国は？
   a. ドイツ　b. フィンランド　c. イタリア　d. アメリカ
2. 　サンタクロースの衣装の赤白は、どの色からきているでしょうか。
   a. 紅白の縁起のいい色　b. 日本の国旗の色
   c. コカコーラの公式商標の色　d. クリスマスを祝うワインの色
3. 　クリスマス島があるのはどの国？
   a. ガンビア共和国　b. ニカラグア共和国　c. プルト共和国　d. キリパス共和国
4. 　クリスマスツリーに使われる樹木ではないものは？
   a. ヒイラギ　b. リンゴ　c. キンモクセイ　d. ヤドリギ

解答用紙
学科　　学年
名前
解答
1.　　2.　　3.　　4.